

故郷を追われた 一人ひとりの ために

UNHCR
in
アフリカ

この10年でアフリカの難民の数は
およそ3倍になりました。
その多くを受け入れているのは
サハラ以南アフリカの5カ国。
世界の難民の2割を占めています。



©UNHCR/Zinyange Auntony



世界全体では…

難民	2,590 万人
国内避難民	4,130 万人
庇護申請者	350 万人

アフリカ

難民	630 万人
国内避難民	1,770 万人
庇護申請者	48万4,000 人

■アフリカで起きていること (2018年)

👤 難民 🏠 国内避難民 🔄 帰還民

 コンゴ民主共和国
アフリカ最大の国内避難民
👤 72万310人
🏠 450万人
🔄 6,630人

 南スーダン
世界第3位に入る難民発生国
👤 230万人
🏠 190万人
🔄 13万6,160人

 ソマリア
帰還民の社会統合
👤 94万9,650人
🏠 260万人
🔄 1万700人

 ナイジェリア
非国家武装集団の活動の活発化
👤 27万6,850人
🏠 250万人

 中央アフリカ共和国
2012年の紛争以降の強制移動
👤 59万880人
🏠 64万970人
🔄 3万5,180人

 ブルンジ
継続的な迫害の懸念
👤 38万7,860人
🏠 3万1,910人
🔄 4万5,540人

 マリ
北部・中部の情勢不安
👤 15万8,280人
🏠 12万300人
🔄 6,680人

 カメルーン
南西部・北西部の暴動
👤 4万5,140人
🏠 66万8,500人

セネガル

今井 飛鳥 Asuka IMAI in Dakar

- 人道支援に必要な情報収集や分析、レポート作成
- 誰もが少しでも暮らしやすい社会の実現に貢献したかった
- 難民、国内避難民が増加傾向にある反面、社会統合も着々と進んでいる
- 故郷に戻った人が家を建て直し、畑を耕している姿を見た時
- 西アフリカの人々の寛容さ



スーダン

吉田 典古 Noriko YOSHIDA in Khartoum

- UNHCRハルツーム事務所代表
- 高校生の時、犬飼道子さんの記事を通じて難民の存在を知った
- 難民に支援を差し伸べている受け入れコミュニティに対する支援
- 着の身着のまま故郷を追われた人を目にする心が痛む
- スーダンの人々の寛容さとホスピタリティ



辻澤 明子

Akiko TSUJISAWA in Kassala

- 9つの難民キャンプでの主にエリトリア難民の保護・支援
- 大学の授業である日突然難民になってしまう人がいることを知った
- 人身取引や密入国の被害、地中海渡航中に命を落とす人がいる
- 2013年のランベドゥーザ島難民船沈没事故で多くの難民が亡くなったこと
- 緑色に透き通った美しい海



大竹 更

Arata OTAKE in Khartoum

- スーダンにおける無国籍者と南スーダン難民を支援するプロジェクトの管理
- 現場に近くやりがいがある
- 紛争や暴力、迫害が長期的に存在し、故郷に帰ることも難しいこと
- 「世界難民の日」に企画したイベントで、生き生きと自国の文化を披露する難民の人たちの姿を見た時
- ピラミッド。エジプトよりも古くたくさんあるとか



コンゴ民主共和国

志村 延子 Nobuko SHIMURA in Kinshasa

- 国内各地のフィールドオフィスとの連絡調整
- 慢性的な情勢不安や貧困が続く国で最も弱い立場にいる人たちに貢献したかった
- 大量の難民に対する持続的な自立に向けた支援
- 紛争で家族を失い困難な立場にあっても前向きに生きる人たちの姿を見た時
- 地元産のコーヒー



ナイジェリア

進藤 プラーテン 美生 Mio SHINDO-BRAATEN in Abuja

- 北部の国内避難民、各国から逃れてきた難民の保護
- 個人で行っていた国際支援活動がきっかけ
- 非国家武装集団の活動による情勢不安で避難民が後を絶たない
- 担当した難民の家族再統合が実現したこと
- ノーワハラ No Wahala! みんなとてもポジティブ



南アフリカ

古田 絵利沙 Elisa FURUTA in Pretoria

- 周辺16カ国をカバーしている地域事務所代表のサポート
- ジュネーブ本部アフリカ局で勤務し、今度は現地ですアフリカ支援に携わりたかった
- 従来の支援を脱却し“win-win”な支援を進めていくこと
- 難民の人たちが持つ強さと創造性に日々感動する
- 笑顔を絶やさず前向きな人々、新鮮な野菜や果物



ケニア

藤田 若菜 Wakana FUJITA in Nairobi

- 不正と汚職撤廃対策、ダダーブ難民キャンプの危機管理
- 外国人の人権、UNHCRの難民認定に関心があつた
- 避難生活が長期化し、帰還や第三国定住の可能性も限られる
- 過酷な環境下にある難民の生活を目の当たりにした時、この人たちのために自分は働いているんだと気持ちを奮い立たせる
- 自分の存在や日々の問題が小さく感じるくらい空が広い



井上 龍

Ryo INOUE in Nairobi

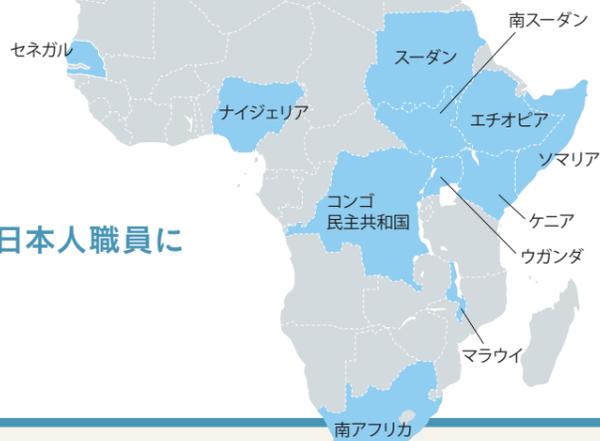
- 東アフリカの難民情報を管理するITシステムの開発と導入、保守
- アフリカは難民の総数が多く、自分のIT技術がより生かせると思った
- ドナーからの資金を最大限活用した効率的な支援、汚職や不正の撲滅
- 導入したITシステムがスイスイ稼働した時
- 年間20度前後の“常春”。ほぼ毎日五月晴れ



日本人職員に聞く!
in Africa

アフリカの難民支援の最前線に身を置く 日本人職員に “アフリカのいま”を聞きました。

- 担当業務は?
- なぜUNHCR、アフリカに?
- 重視されている課題は?
- うれしかったこと、つらかったこと
- あなたのおススメ、教えてください!



ソマリア

森山 毅 Takeshi MORIYAMA in Mogadishu

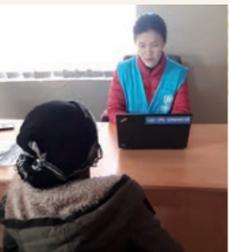
- UNHCRソマリア事務所代表代行
- さまざまな国、バックグラウンドの人と働ける
- 自主帰還が進む一方、いまだ約80万人が周辺国に残っている
- モガディシュ市長が自爆テロで亡くなり、遺体と対面したご家族の表情を見た時
- ソマリアの人々に紛争のない生活を取り戻したい



マラウイ

田中 映江 Akie TANAKA in Lilongwe

- マラウイに逃れてきた難民の保護全般
- 最も助けを必要としている人の役に立ちたかった
- 脆弱な立場にある女性や子どもの性的被害
- 若者が新しいアイデアを生み出し、地域に貢献しようと奮闘する姿を見た時
- 湖や森などの自然が楽しめる



南スーダン

河田 ふじ Fuji KAWATA in Jam-Jang

- スーダン難民保護、南スーダン難民帰還のモニタリング
- 1980年代にエチオピアで起きた飢饉にショックを受けた
- 難民保護の法的整備は進んでいるが、国際法や国内法の実施に課題が残る
- 日本の支援が南スーダンの発展に貢献していること
- 360度見渡せる地平線上に野鳥が優雅に飛んでいる



小池 克憲

Katsunori KOIKE in Jam-Jang

- スーダン国境近くのイダ難民居住地の難民保護
- 誰もが差別されず、尊重される社会の構築に貢献したかった
- 難民の物理的な安全の確保の難しさ
- 難民のリーダーたちに直接感謝の言葉を贈られたこと
- 新鮮なヤギ肉のニヤマチョマ



エチオピア

貝澤 麻衣 Mai KAIZAWA in Gambella

- 7つの難民キャンプにおける「性と性差に基づく暴力(SGBV)」の被害者の支援
- 大学時代に日本で暮らす難民の人たちに出会い助けになりたいと思った
- 児童・強制婚や家庭内暴力、低就学率の背景にある根強いジェンダーの不平等
- 親戚に児童婚を強制されそうになった少女を無事に保護した時
- 地方を回っていると初めて出会う風景の連続! わくわくが止まらない



ウガンダ

岩佐 洋子 Yoko IWASA in Kampala

- 難民保護に関する業務
- 高校時代に留学したスイスで、同年代のボスニア難民の女の子と仲良くなったこと
- 子どもの教育状況の改善、性的暴力の防止と被害者のケア、難民の経済的自立の促進
- 紛争で離ればなれになった親子の再会に立ち会うことができた時
- 美しい自然にあふれた国立公園、人の温かさ



原田 真梨

Mari HARADA in Kyaka

- 難民居住区での難民保護
- 難民支援のニーズが多くある地域だと思った
- 壮絶な避難経験を経た人々への心理的なサポート
- 難民の人たちが披露してくれる情熱的なダンスや音楽から、一人ひとりのパワーと可能性を感じる
- ゴンジャ! 焼いて食べるのがおススメ



古林 安希子

Akiko KOBAYASHI in Kampala

- 政府の難民政策の維持に向けた仕組みづくり
- 高校時代、留学先のカナダのホストファミリーから聞いたイラン革命時に宗教迫害を受けた時の話
- ウガンダが寛容な難民政策をどう維持し、国際社会と責任を分担していくか
- 難民の代表者が地域のハイレベル会議に参加できるようアレンジし、感謝されたこと
- フルーツが日本では食べたことがないほど甘くておいしい!



原 悠祐

Yusuke HARA in Kampala

- ウガンダ政府による難民認定のサポート
- 難民法の国内履行に興味があった
- 政府関係者の難民法への理解が未だ低いこと
- 難民認定に関わった人々たちから感謝の言葉をかけられた時
- ルウォンボヤカトゴなどの郷土料理



UNHCR 親善大使 MIYAVI が見たケニアのリアル



当たり前のように難民の生活に組み込まれているなど、先進的な取り組みも数多く導入されていました。

さらにMIYAVIが驚いたのは、難民たちの身体能力の高さ。かつて、日本でサッカーに情熱をささげた経験のあるMIYAVIもプレーについて行くのがやっと。困難に立ち向かいたくましく生きる、難民たちのポテンシャルを実感しました。

そして最終日、難民キャンプ周辺は若者たちで大にぎわい。難民も、地元の人たちも、みんながMIYAVIがかき鳴らすギターに合わせて、心と声をひとつに歌いました。「現地で子どもたちと交流したり、音楽を奏でたりして得たインスピレーションから音楽を作り、難民問題をカッコよく伝えていきたい」と決意を新たにしました。

©UNHCR/Allan Kiprotich Cheruiyot



一面に広がる青空、ジリジリと照りつける太陽。2019年3月、UNHCR親善大使MIYAVIが降り立ったのはケニア。これまで訪れたアジアや中東などの難民支援の現場とはどこか違う、大地からわき起こるパワーにあふれていました。

首都ナイロビから空路、北西部国境近く

のカクマへ。アフリカ最大規模の難民キャンプがあり、18万人以上が長期の避難生活を余儀なくされています。

学校の教室の大きさは日本と同じなのに、1クラス200人規模という“マンモス学級”も普通。教師や教材も足りていません。一方、電子マネーを使った現金給付支援が

MADE51～難民の“匠”のものづくり



紛争や迫害により故郷を追われた人たちが、それぞれの人生で培ってきた技術を生かして避難先で仕事を得るのは簡単なことではありません。

しかし、苦難を乗り越え生き抜いてきた難民一人ひとりが持つ可能性は無限大です。

UNHCRは難民の“匠”が自身の技術を駆使して生み出した手工芸品を「MADE51（メイド フィフティーン）」としてブランド化し、世界市場に売り出すという挑戦を2016年から続けています。避難先でも安全と尊厳をもって生活が送れるよう後押しする難民支援のカタチです。

アフリカからも、数々の人気商品が生まれています。ルワンダのブルンジ・コンゴ難民によるコイル編みのバスケット、ブルキナファソのマリ難民による金属を革で覆ったアクセサリーやボール、タンザニアのブルンジ難民が食料袋の繊維を裂いて編み込んだバスケット、東アフリカの染物技術を生かした布などは、MADE51の人気ラインアップに。アフリカの難民たちは自身の誇りをかけて、“売れる”商品づくりに汗を流しています。



国連難民高等弁務官 (UNHCR) 駐日事務所
〒107-0062 東京都港区南青山6-10-11 ウェスレーセンター
www.unhcr.org/jp/

